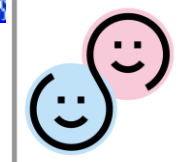


KSK 湘南ふくしネットワーク

オンブズマン(新聞) 広報57号

編集責任者：NPO法人 湘南ふくしネットワークオンブズマン 相川 裕
事務所：〒253-0043 神奈川県茅ヶ崎市元町5-22 永井ビル3階
電話・FAX：0467-85-6660 直通電話090-4937-4904 定価30円
ホームページ：<http://www.npo-snet.com> eメール：info@npo-snet.com



S-NET

“お友達プロジェクト”始動です!!

人は将来の事を考える時、「誰と暮らそう?」「どこで暮らそう?」「どんな事をして過ごそうかな?」等、具体的なイメージを描いていきますが、その発想のもとになっているのは、今までに出会った様々な人や場所、そして経験です。人はそのように、自分の人生で得た人間関係や起こった出来事を土台にしながら将来を考えていくものです。

3年前の「津久井やまゆり園殺傷事件」を受け、現在、同園の利用者さんの一部が、横浜の芹が谷園舎で暮らしています。そして今、職員さんが中心となって、利用者さんに対し、「将来どんな暮らし方をしたいか(意思決定)」の支援と確認がおこなわれています。



でも、生まれてから今まで、家族や職員さんとだけしか接点がなかった知的障がいの方が多いため、経験や出会いが少なく対等におつきあいする関係の人もいない中で、なかなか自分の将来の事を決めるのが難しい事がわかってきました。

そこで今回Sネットは、かながわ共同会からの委託を受けて、家族や職員以外の「お友達」をつくるプロジェクトを立ち上げました!! 支援者と利用者さんの関係とはちょっと違う、「普通のお友達」が、利用者さんを訪問する取り組みです。

月に数回、知的障がいの方1人にお友達数人が一緒になって、まずは芹が谷園舎内でお話ししたり一緒に園内をめぐったり。でも仲良くなったら、もっと色々なことにもチャレンジしていく予定です!

2年間のこの事業、どうぞ皆様も応援してくださいね!



NPO 法人 湘南ふくしネットワークオンブズマン主催研修会 **【報告】****「やる気と元気の出るお話」～あなたの支援、ホントにそれでOKですか?～**

特定非営利活動法人湘南ふくしネットワークオンブズマン(以下「S ネット」)では、6月1日(土)と7月20日(土)の2回にわたって「やる気と元気の出るお話」～あなたの支援、ホントにそれでOKですか?～ と題する研修会を開催いたしました。

私達は、福祉オンブズマンとして活動をしていますが、長く福祉オンブズマン活動をしていると、(当事者の方々との意思疎通・相互理解が深まるというメリットもある一方で)事業者の事情もよく分かってきて、オンブズマン側の物わかりがよくなりすぎるてはいないか、と心配にもなります。もっとよい実践ができる可能性があるのに、「よくやっておられますね」と労をねぎらうだけにとどまってしまうてはいないだろうか・・・、と。

S ネットが始まるきっかけは、スウェーデンに権利擁護の視察に行き、衝撃を受けるとともに、スウェーデンでできるのなら自分たちだってできるはずだと思ったことでした。しかし(北欧に行かなくとも)日本にも、優れた権利擁護の実践をしている支援者が何人もいるのですから、そのような人たちに日々の実践を語ってもらうことで、私達はオンブズマンとして・権利擁護の担い手として刺激を受け、知識の面でも姿勢の面でも多くを学べるのではないかと、そして、オンブズマンが訪問している事業所の職員の方々にも参加していただくことで、日頃の自らの実践をふりかえってもらうことができるのではないかと考えた次第です。

そのスウェーデン旅行を企画した故副島弁護士は、障がい者に対する権利侵害の問題を社会に示していく一つの方法として「訴訟」を使っていたのですが、裁判を戦っている間の当事者の生活という事に物凄く配慮して、そこは非常に信頼できる支援者の人達に担ってもらっていました。そういう意味で、施設の職員や支援者の人達に厳しく高い要求水準を持っていました。そこで、その副島さんに深く信頼され、今も大変ご活躍されている支援者お二人を、講師としてお招きしました。

(ご挨拶：理事長 相川裕)

1日目：講師：大竹真澄さん(一社)lykke(リュック：デンマーク語で「幸せ」)代表理事

通勤寮、入所、通所施設、日本知的障害者協会生産就労部会。全国社会就労センターなどで長を歴任され、障害のある人が地域で安心して安全に暮らせるように、少しでも工賃を多く稼げるように全力を尽くされ、現在は相談支援事業所を立ち上げ、厳しい困難を抱えた人の支援をされています。

- ・ 今、総合支援法になって記録が重要視され、本来あるべき「利用者主体」が途中で消え、浸透しなくなっている(本当に必要な記録は何か要検証)。措置から契約になった時に、自己決定・自己選択・対等な関係に変わったが、これが本当に行われているか検証する必要がある。
- ・ まずは、受講者はレジュメに用意されたワークシートで自分の支援の振り返りを行った。



- ・ 利用者を『幸せ』にするために何が必要か考える。「個別支援計画は本人のニーズに依っているか」「本人の求めているプログラムを作成しているか」「利用者の成長を信じているか」「利用者と共に学びながら進もうとしているか」、そしてその支援はエンパワメントにつながる支援かを考える。
- ・ 知的障がい者の結婚・性教育：問題行動を起こしてしまう原因の多くが性的問題。性教育は一人ひとり違うのでこの方法が良いというものはない。中途半端ならやらない方が良い。

一番肝心の「人を好きになることの素晴らしさ」を教える。そして人を好きになった時「この人を大事にしよう」と思えるようにすること。出会いの場を用意するが、くっつけてしまっ



けない。自然に「この人と一緒に居たい」と思ったら自分たちの力でなんとかできる。性の問題は、本人は言うに言えないし表現しづらい。それを理解できる支援者が多くなってくれると良い。仕事をして自立して結婚して子どもを産みたいと思っている女性利用者はたくさんいる。

- 利用者に「幸せって何だ?」と聞いてみてください。分からない人も多いが、その分からない所を紐解くしかない。障がいの軽い人は障害者手帳なんて破り捨ててしまいたいと思っている。その気持ちを分かってあげて支援できるかどうか、幸せにつながる支援ができるかどうかにかかっているのではないかと。支援者の仕事は、イキイキと生きていく「自信を付けてあげる」こと。



- 一般就労するのであれば労働者としての知識を教えてあげる。グループワークや個別学習もやっている。必要なことを選べるようにすると「こういうことを学びたい」と要求が出てくる。
- 「成熟した民主主義」の国デンマークの福祉の理念の流れノーマライゼーション・インテグレーション・インクルージョン(「包み込む」ではなく「お互いの違いを認め合う」こと)と教育制度。
- 最近運営する農業事業で農業規格 JGAP の認証を取得した。とれた野菜が高く売れ工賃に反映。
- 地域の特徴をつかみ市場調査。本人の持っている力を引っ張り出す。今、アート、自閉症の人が創り出す作品を、職員はどう売るかを考え営業。社会貢献を標榜する会社などに絵 1 枚月 6 万円で貸し出している。北海道では酪農で、長崎では鯛の養殖で、日本で一番高い工賃を出している。テレビもボーっと見ているのではなく、「何かヒントがあるぞ」と思って見なければ。
- 障がいがある故に苦しんでいる人がたくさんいる。その苦しみは「本人のせい」ではない。夢さへ描けない現実だが、小さな幸せを積み重ねて、大きな幸せにつなげていくと、大きな夢を描けるようになる。

みんな幸せになりたいと思っているので、医学モデルから社会モデルに変えていく。環境を変え、家族の意識を変える。職員の意識を変える。もう一つ大事なものは地域の意識を変える。そこをみんな頑張ってやっていきましょう。

2日目：講師：金子絵美子さん (社福) 東京緑新会 地域生活相談室 おあしす 相談支援専門員

大学生の時に社会学に出会い、ボランティアで行った施設で福祉の仕事に目覚め、そのまま就職。利用者の意志ではない不妊手術を副島弁護士の支援を受けて阻止。その時々には無くても本人のニーズに応じてこれ(24 時間対応緊急短期入所、グループホーム、就労支援、ジョブコーチ)、様々な職種を経験され、厳しい状況に置かれても「仕事が楽しくてしょうがない」と言われます。

受講者はお話を聴き、ロールプレイに参加しながら、仕事を楽しむ秘訣を教えてくださいました。

- 現在勤めている多摩療護園は都立の施設で、施設型オンブズマンを最初に導入した施設でもある。施設が運営する相談支援事業所で地域の障がい者の計画相談をしている。所属施設の利用者の相談はしていない。



- 過去、虐待が多発した時代を経て、チェック機能ができ、倫理綱領やマニュアルがいっぱい作られたが、現場で反省して議論をして作り上げたものではなかったので、あまり見られなかった。
- 利用者の支援の向上のために都に交渉したり、組合を作って運営者と戦ったりした。その時代は利用者職員が同じ方向を向いて戦っていたので、労働というより運動であり生き方そのものだった。それがいつの間にか Work (創造、達成) が賃金労働 Labor (苦役・重荷) になって



しまい、福祉職は「3K職場」というイメージになってしまった。

- 福祉が国の責任となり「措置」になったが、2000年に「契約」になって自分たちの手に戻って来たが、「支援」が「サービス」に変わり、商品化され「報酬単価」が設定され、利用者の気持ちに寄添うなどお金にならない事は軽視されるようになってしまった。もう一度支援に立ち返り、商品パッケージされていない「ホスピタリティ(相手に心を込めて尽くす)」や「志」を復活させると仕事の面白味や楽しみを実感できるのではないか。
- (仕事を楽しくする方法ヒント1:自分の頭で考えてみた) 前任者がやっていた方法をそのままやって支援の意味を考えないでやっていることがある。医療職に禁止されたら言うことを聞いてしまうが、「健康に悪いんだって、どうする?」と聞いて、自己決定するのを支えるのが支援者の仕事。マニュアルでの仕事は面白くない。アドボケートしていくのが専門性。
- (ヒント2:ないから作ってみた) 陶芸ガマがあるから陶芸作業ではなく、本人の力に合わせた作業を創り出す。アパレル系ではなくアパレル(暴れる)系(布裂き・ウエスとして売る、ラジカセを投げて壊して部品でアート)など。利用者が作業をどうしたら分かるか、どうしたらできるかという事を突き詰めて方法やジグを考えていくと、自分の力になるしやり甲斐になる。



舞台での4人のロールプレイを皆で見る

- (ヒント3:目の前の人の人生を感じる事) その人のこれまでの人生や環境を理解する。時々その人の側になって考えていくしかないのでは。(必死で生きている親子の事例など/時に命がけの支援になることも!)
- (ヒント4:地域・社会を意識する) どんなに頑張っても施設ではできない地域しかできない支援がある。地域移行できる人は限られているので、地域を施設に呼び込んでしまえばよいと考えカフェを開いた。外に

出ていけない高齢障がい者に店長になってもらった。幼稚園が利用してくれたり、学校が不登校の出席数に認めてくれたり、芸術家が好きで来てくれたり、様々な人が来てくれている。突然の地域移行は無理。地域の人達に知ってもらって、施設も地域を知って、移行できる土壌をちょっとずつ作っていく。

- (ヒント5:チーム(仲間)を作る) 失敗や侵してしまった小さな虐待を告白できたり、つらかった思いを受け止めて意見を言ってもらえる上司や仲間が居れば、怒りが利用者に向かない。認められないと攻撃が利用者に行く。仕事をしていて気が付いたことを仲間同士で共有する場があると良い。話し合える仲間が居ることで、大きな虐待を防ぐことができるのではないか。

人は優しい支援だけでは生きられない。居場所があり、自分が役に立っていると感じる事ができればイキイキする。それはみんな同じではないか。サービスから支援を取り戻し、「社会を変えるんだ!」くらいの感じでやったら、こんな面白い仕事ないし、楽しい。

(研修会メモ 文責:江崎康子)

賛助会員 入会のお願い

私たちは、ノーマライゼーション社会の実現を目指し、権利擁護活動を行っています。

賛助会員としてご入会いただき、私たちの活動をご支援くださいますようお願い申し上げます。

- ◇賛助会員 会費
 - ・個人 年額 一口 1,000円 (一口以上)
 - ・法人 年額 一口 5,000円 (一口以上)

◇ご入会の方法:郵便振替書により下記口座へ会費をお振込みください

郵便振替口座番号:00210-9-75496

口座名義人:NPO法人 Sネットワークオンブズマン

